

チャペル・メッセージ

★今週の聖書：ヨハネによる福音書 21章1～14節（聖書を開けてください。）

★今週の賛美歌：375番（イースターの賛美歌ではないけれど）

★「ティベリアス湖畔で朝食を」

「電子かわら版 チャペル・アワー」でメッセージを掲載するのも3回目となりました。続けて読んでおられる皆さんは、「ずっとヨハネ福音書が続いているな～」と思っておられるでしょう。そうです、今年にはできる限り「ヨハネによる福音書」を続けて読んでいこうと考えています。なぜなら、2020年、日本基督教団、という日本で一番大きいプロテスタント教会は、日曜の礼拝のための聖書朗読カレンダー（「主日聖書日課」などと呼びます）の「主なる福音書」として「ヨハネによる福音書」を指定しているからです。新島学園も、この日本基督教団と深いつながりのあるキリスト教主義学校



<https://www.orthodoxianewsagency.gr/g/notes/otan-o-petros-anagnorizei-oti-o-xristos-den-itan-enas-aplos-profitis/>より

です。日本中で1700ほどもある日本基督教団の教会（感染防止を考えて日曜に集まって礼拝するのを中止している）の方々と同じ聖書を読んで、「チャペル・アワー」のメッセージを分かち合いたいと考えています。

それに、私たちの学校の「建学の精神」の基盤をなす教育理念＝キリスト教を徳育の基本として知的教育を実践する、を提唱した新島襄は、このヨハネによる福音書を愛読しました。私たちも、新島襄がどんな思いで4つもある福音書のうちから、特にヨハネを愛して読んだのか、想像しながら読み進めていきたいと思います。

さて、今日の物語は「ティベリアス湖畔」での出来事だと記されています。先週まで、弟子たちはユダヤ王国の首都、エルサレムにいたはずなのに、この「ティベリアス湖畔」とはどこでしょうか。「ティベリアス湖」とは、実はユダヤ人たちが付けた名前ではありません。イエスやその弟子たちが生きた時代にユダヤ王国を実質上支配していたローマ帝国の偉い人たちが、ユダヤ人たちが「ガリラヤ湖」と呼んでいる、王国北部の美しい湖を、自分たち流に（ユダヤに実質支配を敷いたローマ皇帝の名を付して）変更させたのでした。

皆さんの聖書の後ろのページから開けてみると、何枚か地図がのっているのですが、その中から、「新約時代のパレスチナ」という地図を見ていただければ、「ガリラヤ湖」がどこか解るでしょう（探してみてください）。この「ガリラヤ湖」周辺の地域をガリラヤ地方といい、ここが、イエスの弟子たちの故郷であり、またイエスが育った地域でもあります。つまり、弟子たちは、先週読んだ聖書の箇所ではエルサレム（地図で探してみましよう、「死海」の北端から西へ・・・）にいましたが、今日は「故郷」に帰っている、という設定です。

彼等は湖のほとりに、何といてすることもなく座っていたようですが、ペトロが突然立ち上がって「漁に出る」と言ったものですから、何人かが彼と一緒に湖に船で乗り出しました。ペトロと、あと少なくとも3人（ゼベダイの子たち＝ヨハネとヤコブ、それにペトロの兄弟アンデレ）は、イエスの弟子になる前はガリラヤ湖の漁師でした。夜の漁も、きとお手の物のはずでした。しかし、夜通しの漁を行っても、彼らに収穫はありませんでした。なんとという徒労、そして落胆。ところが。

その弟子たちに岸から誰か（＝福音書記者ヨハネは、それがイエスだと教えてはくれています、弟子たちは知らない～どこかで見た「仕掛け」ですね）が声をかけ、不漁であったことを聴くと、「船の右側へ網をおろしてみるように」と促しました。すると、あっという間に舟が傾くほどの漁の成果があったのでした。そして。

誰かが「あの、岸から呼びかけた人は主＝イエスだ」と気が付き叫びます。この時のペトロの慌て様。こん

な姿を見られたくない！漁をするため腰布一つで作業していたから、ということもあるでしょうが、その上に、エルサレムで復活の主に出会って、その喜びを広く伝えるように送り出されたのに、こうして故郷に逃げ帰って、また漁師として「燻る」姿を見られたくなかったのかもしれない。エルサレムでは2度も復活のイエスと出会ってあれほど喜びを感じ、勇気を得たのに。「復活のイエス」はしかし、すぐに姿を消してしまわれる。本当に一緒にいてくださるのか？いや、自分たちは本当に「復活のイエス」に出会ったのか？夢を見ていたのでは？そう思うと心がしぼんできて、どうしていいのかわからない。だから、またガリラヤ湖の漁師に戻ってしまおう、イエスはやはり死んでしまったという「現実」に向き合おう、ということだったのかもしれない。でも。

三度目の正直。エルサレムだけでなく、復活のイエスはガリラヤでしょんぼりしている弟子たちの前にも表れたのでした。故郷に戻って、イエスと出会う以前の生活になんとか戻っていかうとする弟子たちに声をかけ、不漁の徒労のあとに大漁の喜びを与え、更に、彼等が湖上で夜通し漁をしているときから準備していたに違いない炭火のバーベキューで魚を焼き、パンも用意して朝ごはんをふるまってくくださる。「ああ、イエスは復活して、いつも、どこにいても一緒にいてくださる」。弟子たちは今度こそ、本当に納得したに違いありません。エルサレムで2度、訪ねてくださった時のように、十字架の出来事の前と変わらず、普段通り、一緒に魚を分け合い、一つのパンを割り分けて弟子たちの日常の中にすっかり溶け込んで共にいてくださるイエスの存在に安堵し納得したとき、弟子たちはもう、「あなたは誰ですか」と確かめる必要もなくなっていたでしょう。

ところで、新約聖書はもともとギリシャ語で書かれているのですが、そのギリシャ語で「魚」と訳される言葉には2種類あります。4つの福音書ではほとんどの場合「イクトゥース」が使われますが、この物語の中では「イクトゥース」ともう一つ、「オブサリオン」が使い分けられています。実は、魚に「オブサリオン」を使うのは非常に希な用法です。

イエスが「何か食べるものはあるか」と問われた「食べるもの」、そして岸の炭火の上でイエスが焼いている「魚」が「オブサリオン」、弟子たちが網に捕らえる「魚」が「イクトゥース」です。実のところ、「オブサリオン」とはパンと一緒に食べるおかずを意味し、「海（水）からとれる」から魚、陸からなら肉、という解釈だと言われています。主食に対してのメインディッシュが「オブサリオン」なのです。一方「イクトゥース」は食用であれなんであれ魚類が全て入ります。興味深いのは、弟子たちが夜通し探し求めるものも、「舟の右側」から引き揚げるものも「イクトゥース」であるのに対し、イエスが手に触れる「魚」、つまり弟子たちのための食事として準備されるものが「オブサリオン」だということです。弟子たちが網でとらえた153匹は、弟子たちの手の中にある間は「イクトゥース」ですが、イエスに手渡した途端「オブサリオン」になるのです！

復活のイエスが、弟子たちが捕らえた（ただの）「魚」を、食事として、弟子たちの活力の元となる食べものとして、その手ずから分け与えてくださる。復活の喜びをいつも持ち続けることの難しい弟子（そして人間全般）たちに、絶妙のタイミングでその喜びを思い起こさせるイエス。日常生活の何気ない一コマ、食事の場面にすっかり溶け込んで、労働の対価として得た食材を、ただ空腹を満たすための「餌」ではなく、身体も心も満たして力づけ、支え、リフレッシュさせる「食事」として差し出される「復活のイエス」、という描かれ方に注目したいと思います。

今日の皆さんの食卓にも、そんなイエスの姿があるのかもしれない。どうでしょう？

【祈り】今日の労働の対価として、私たちに必要な食べ物を、すべての人にあたえてください。今日、私たちの得る食べ物を、あなたの手で与えられる、身体と心の力の源としてください。

アーメン。